

巻 頭 言

『異文化経営研究』第15号発刊にあたって

『異文化経営研究』(Transcultural Management Review) 第15号を発行することができ、誠にありがたい。本号には、レフリーによる査読を経て選ばれた研究論文2篇、ケーススタディ2篇に加えて、招聘論文1篇と研究会および研究大会の講演抄録2篇が掲載されている。(研究論文の1篇は当学会が研究助成をした会員の成果である)。発行に至るまで多大なご尽力をいただいた執筆者や編集者をはじめ、関係者の皆さまに心より御礼を申し上げます。

前号の巻頭言で、実践に近い学問領域である経営学がもっとアカデミックに貢献することが求められており、そのためには優れた論文を世に出す必要があると訴えたところ、本号に向けては多くの投稿があり、厳しい審査を通してめでたく掲載された論文が例年より多くなったことは大変喜ばしいことである。投稿された方々の努力と勇気を称えたい。

さて、2003年3月に産声を上げた本学会であるが、本年は人生の無常を感じさせることがあった。ひとつは設立の翌年より本年に至るまで理事として本学会を支えてくださった早稲田大学の太田正孝教授が9月末に急逝されたことである。太田先生は異文化マネジメントの第一人者であり、当学会の研究大会の開催校を何回も引き受けてくださり、また、本学会5周年を記念して出版した『異文化経営の世界』への執筆や研究大会でのコメンテーターなど、様々な面でご支援をいただいた。ここに長年のご貢献に対して敬意を表し、心より感謝申し上げたい。もうひとつは、日産のカルロス・ゴーン氏の失墜である。ゴーン氏は実業界における異文化経営の実践者としてロールモデルとも言うべき人であった。事実の解明が待たれるが、強力なリーダーであればあるほど、*integrity* がいかに大切かを改めて世に喚起した事件とも言えるのではないだろうか。まさに世は常ならず、栄枯盛衰を感じる次第である。変わりゆく世の中であって、変わらないものは何なのか、自分の信念をしっかりと持ち、貫くことの重要性を痛感するこの頃である。

異文化経営学会では、研究大会に加え、インターナショナルセッション、中部部会、関西部会、九州部会、北陸部会と、活動の輪がますます広がり、それぞれが特徴を生かし、活発に展開している。ぜひ、いろいろな活動にご参加いただき、交流の輪を広げていただきたい。今後も様々な価値観の方々と切磋琢磨し、共通点を見出し、共感することができるよう、会員の皆様とともに歩んでいきたいと切に願っている。

今後ともご支援を賜りたく、お願い申し上げます次第である。

2018年12月

異文化経営学会 会長

馬 越 恵 美 子